

丹波篠山の黒大豆栽培 ～ムラが支える優良種子と家族農業～

丹波篠山の黒大豆栽培・300年の歴史

日本農業遺産認定

「丹波黒」の数奇な運命80年

丹波篠山では、少なくとも300年以上前から黒大豆が栽培されてきました。それでは、現在、日本各地で栽培されている黒大豆「丹波黒」は、いつどのように生まれたのでしょうか。

80年前の昭和16年(1941)のことです。兵庫県農事試験場(現：兵庫県立農林水産技術総合センター)が、丹波篠山で古くから栽培されていた黒大豆の在来種を取り寄せて品種比較試験を行いました。この結果、最も優良だったものを県の奨励品種(※)として「丹波黒」と命名しました。

昭和20年代後半から昭和35年頃、黒大豆は水稻に比べ収益性が低かったこともあり、当時の栽培面積は10ha程度と振るいませんでした。さらに、昭和41年(1966)時点で22haと普及が進まず、良質な黒大豆は丹波地方の一部で栽培されるものだけとなり、県が奨励する品種から外されてしまいました。まさに「丹波黒」は消滅寸前でした。

ところが、昭和46年(1971)、米の減反政策が本格化すると状況は一変します。「丹波黒」は転作作物として栽培面積を拡大していきます。昭和55年(1980)には117ha、20年後には約5倍の598ha、さらにその20年後の令和2年(2020)には約6.5倍の760haまで広がりました。

奨励品種から除外されるという数奇な運命をたどった「丹波黒」。命名から80年の年月を経て、現在では全国で3,000haを超える面積で栽培されるようになりました。

※奨励品種：各都道府県がその都道府県に普及すべき優良な品種として決定した品種のこと。

「丹波黒」栽培面積の推移(ha)

